

日語的重疊形容詞： 其形態、意義、機能

湯 廷 池

東吳大學日本語文學系碩博士班 客座教授

中文摘要

本文針對日語裡以重疊的詞幹與詞綴「-しい」合成的「重疊形容詞」，討論其詞音形態、詞義內容與句法功能。首先，在第一節的「前言」裡扼要介紹本文的目的與大綱，然後在第二節「重疊形容詞的詞音形態」、第三節的「重疊形容詞的詞義內涵」與第四節「重疊形容詞的句法功能」裡依序論述日語重疊形容詞的詞音形態、詞義內涵與句法功能的特徵以及三者之間的相互關係，並在最後一節的「結語」裡以「痛い、痛ましい、痛々しい」、「憎い、憎らしい、憎たらしい、憎々しい」等為例討論在日語教學的現場裡如何區別這些關聯詞語的意義與用法。

關鍵詞：日語形容詞、重疊形容詞、「イ形容詞」與「シイ形容詞」、用重疊表示強調、重疊形容詞與程度副詞、屬性敘述與事象敘述、敘述用法與限定用法、形容詞的正面意義與負面意義

日本語の反復形容詞： 形態・意味と機能

湯 廷 池

東呉大学大学院日本語学科 客員教授

要 旨

本稿は、語幹が反復された後に「-しい」が付加された式型をもつ、日本語の反復形容詞について、その音声形態・意味内容と統語機能を論じたものである。まず、第一節の「はじめに」で本稿の目的と大要を紹介した後、第二節「反復形容詞の音声形態」・第三節「反復形容詞の意味内容」・第四節「反復形容詞の統語機能」と順を追って反復形容詞における音声形態・意味内容・統語機能それぞれの特徴と相互の関係を討議し、最後の節「結び」では「痛い・痛ましい・痛々しい」や「憎い・憎らしい・憎たらしい・憎々しい」などの意味や機能をいかに区別すべきかについて、現場における日本語教育での実際応用と考え合わせながら、比較分析を行う。

キーワード：日本語形容詞、反復形容詞、「イ」形容詞と「シイ」形容詞

反復による強調、反復形容詞と程度表現、属性叙述と事象叙述

述定用法と装定用法、形容詞のプラスイメージとマイナスイメージ

The Reduplicated Adjectives in Japanese: forms, meaning, function

Tang, Ting-chi

Visiting Professor of Department of Japanese Language and Culture
Soochow University

Abstract

The present paper aims to discuss Japanese “reduplicated” adjectives consisting of the adjective ending “-shi” attached to reduplicated stems, with regard to their phonetic shape, semantic content and syntactic function. The paper consists of five sections. The first section introduces the aim and contents of the paper, followed by three sections dealing, respectively, with the phonetic shape, semantic content and syntactic function. Finally, the last section illustrates how the related adjectives, such as “” and “” can be taught in the actual classroom teaching Japanese.

Key words: Japanese adjectives, “reduplicated” adjectives, “-i adjectives” and “-shi adjectives”, emphasis by reduplication, reduplicated adjectives and degree adverbs, property description v. eventuality description, predicative v. restrictive use, plus-image v. minus-image adjectives

日本語の反復形容詞： 形態・意味と機能

湯 廷 池

東呉大学大学院日本語学科 客員教授

一、はじめに

日本語の形容詞の中には、「XX しい」の形を取るものが少なからずある。すなわち、語幹の「X」を反復（あるいは、**重複**（reduplicate））した後に「-しい」が付いた形容詞で、これを **反復形容詞**（reduplicated adjective）と呼ぶことにする。反復形容詞を **単純形容詞**（simple adjective）と見るか、それとも **派生形容詞**（derived adjective）と見るかについては、これら形容詞の定義のしかたや分析する人達の視点によって結論が分かれるところであるが¹、この問題は暫く棚上げすることにして、本稿では反復形容詞の音声形態・意味内容と統語機能について考察を進めていくことにする。ことに、音声形態・意味内容と統語機能の三者の間における

¹ 「XX(し)」そのものを語幹とみなし、「-(し)い」を形容詞の活用変化とみなせば、反復形容詞は単純形容詞とみなすことができるが、このような分析のもとでは「X い」（例えば、「憎い」）・「X らしい」（例えば、「憎らしい」）・「XX しい」（例えば、「憎々しい」）の語幹「X」と「XX」が同等に語幹とみなされ、「XX」が「X」に比べて強調の意味を表すことを説明するために、別のメカニズムが必要になってくる。また、反復形容詞は語幹の「X」が反復（あるいは、重複）によって強調を表した後、形容詞化接尾辞の「-しい」が付いたとみなせば、派生形容詞とみなすことができるが、派生の過程において反復や重複のような操作が存在すべきやという問題が起ってくる。また、重複は **派生**（derivation）ではなく、**複合**（compounding）と主張する学者もいるかもしれない。筆者の知る限り、この方面についての先行文献は少ないようである。

相関関係に焦点を絞って論考していく。本稿の構成は大体次のようである。まず、第 1 節の「はじめに」で本稿の目的と大要を紹介した後、第 2 節「反復形容詞の音声形態」・第 3 節「反復形容詞の意味内容」・第 4 節「反復形容詞の統語機能」と順を追って反復形容詞における音声形態・意味内容・統語機能それぞれの特徴と相互の関係を討議し、最後の節「結び」では「痛い・痛ましい・痛々しい」や「憎い・憎らしい・憎たらしい・憎々しい」などの意味や機能をいかに区別すべきかについて、現場における日本語教育での実際応用と考え合わせながら、比較分析を行う。

二、反復形容詞の音声形態

日本語の反復形容詞は、反復される語幹を **変数** (varialbe) の「X」で表し²、
「XX しい」という式型で表すことができる。この式型は次のような反復形容詞に関する音声事実を表す。

(一) 語幹の「XX」は、ごく少数の和語系や漢語系語幹が「おお(雄々)しい(いでたち)・めめ(女々)しい(振る舞い)」「ゆゆ(由々)しい(出来事)・りり(凜々)しい(顔付き)」のように 1 モーラの語幹からなり、和語系語幹が「おどろおどろしい(神鳴りの音)」のように 3 モーラからなる例外を除いては、原則的に 2 モーラである。また、そのアクセント型はすべてアクセント核が「-い」の前の(すなわち、反復形容詞の語尾から数えて **第 2 番目**の (penultimate)) モーラに落ちる中高型で、「シラジラシ¹イ・リリシ¹イ・オドロオドロシ¹イ」のように発音される。また、これらの語幹はみな母音で終り、「ぎょうぎょう(仰々)しい・こう

² 反復語幹の前後関係を表すために、「X₁」や「X₂」のように下書きのアラビア数字で **線形順序** (linear order) を示してもよい。

ごう(神々)しい・ずうずう(図々)しい・そうぞう(騒々)しい・れいれい(麗々)しい」のように引き音（すなわち、長母音）で終るものはあるが、特殊モーラの撥音「ン」や促音「ッ」で終るものはない。このことは、これら語幹が原則的にやまと言葉の和語系語彙に源を発していることを物語るものではなかろうか³。

（二）接尾辞「-しい」の「し」は必ず清音で発音され、「ひもじい・すさまじい」のように「し」が濁って発音されることはない。また、第 1 語幹 (X₁) と第 2 語幹 (X₂) の間で第 2 語幹の **頭子音** (initial consonant) が **連濁変化** (sequential voicing) を起す現象が「かるがる(軽々)しい・こうごう(神々)しい・ことごと(事々)しい・そうぞう(騒々)しい・そらぞら(空々)しい・はなばな(華々)しい・ふてぶて(太々)しい・ふるぶる(古々)しい」などの語例に例外なく見られるが、第 2 語幹の第 2 モーラがすでに濁音を含んでいる「かどかど(角々)しい・くだくだしい・くどくどしい・けばけばしい・すがすが(清々)しい・たどたどしい・とげとげしい・はではでしい」などの語例では、「後部要素（すなわち、第 2 語幹）がすでに濁音を含んでいる複合語では連濁は起らない」⁴ という **ライマンの法則** (Lyman's Law) に従って、第 2 語幹の頭子音で連濁が起っていない⁵。

（三）（一）で記述された反復形容詞のアクセント型（すなわち、アクセント核が一律に語尾から数えて第 2 番目のモーラに起る中高型）は、日本語複合名詞のア

³ 「仰々しい・神々しい・図々しい・騒々しい・麗々しい」などの語幹は漢字で表記されることがあるが、「仰々しい」「騒々しい」など当て字が使われていると思われるものがあるので、これら引き音語幹がはたして漢語系語彙であるか定かではない。しかし、窪菌（1999：122）が指摘するように、一般に漢語語幹からなる複合語は入力構造を保持しやすいので、これら語例のアクセント型が一律に語尾から数えて第 2 番目のモーラにアクセント核をもつ中高型に属し、かつ、次の段において説明する連濁現象やライマンの法則の適用に関しても、すべての語例が同一の効果を示しているということは、その語源が同一であることを示唆するものではなかろうか。

⁴ 窪菌（1999：123）を参照されたい。

⁵ 連濁の現象やライマンの法則は一般に単純語や派生語よりも、複合語に多く見られるものなので、この事実は反復形容詞が単純形容詞や派生形容詞ではなく、複合形容詞であることを示唆するものであるかもしれない。

クセント型によく似ている。すなわち、両者ともに、語頭から数えて第 2 番目のモーラでピッチが上昇し、語の途中（すなわち、語尾から数えて第 2 番目のモーラ）でピッチが下降するピッチの山が作り出されているのである。これは、複合名詞では窪菌（1999 : 21）が指摘するように、複合語を構成する語幹それぞれがもっているアクセント型が壊れ、一つのアクセント単位が作り出されることによって、意味的に 1 語としてのまとまりを示すという機能が働いているものと思われる。反復形容詞は、語幹の反復複合からなる複合形容詞である、とは直截的に言えないにしても、複合名詞と同じようなアクセント型を持つことによって 1 語としてのまとまりを示すということは言えるのではなかろうか。

以上の事実から、日本語の反復形容詞は統一的な音声形態をもち（例えば、**分節的に**（segmentally）語幹は母音で終り、撥音や促音で終るものはないことや、**超分節的に**（suprasegmentally）中高型のアクセントを呈することなど）、同じような音韻規則や原理（例えば、連濁現象とその背後にある **同化**（assimilation）の原理、ライマンの法則とその背後にある **異化**（dissimilation）あるいは **必異の原理**（obligatory contour principle ; OCP）⁶ など）に従っていることが判明される。これらの事実は、日本語の単純形容詞が頭高型（2 モーラ語）・中高型と平板型（3 モーラおよび 3 モーラ以上の語）の 3 通りのアクセント型を持つこと、同じく「シク活用」に属する形容詞でも語幹が反復しないものには「-シイ」と「-ジイ」の 2 通りの発音が見られること、他の派生形容詞では「-(ッ)タルイ」・「-(ッ)ポイ」・「-(ッ)コイ」・「-ポッタイ」のように促音の存在が許される⁷ こと、などと比べてみると、如実に反復形容詞の音声的特徴を物語るものであると言えよう。

⁶ 窪菌（1999 : 123－124）を参照されたい。

⁷ 同じく「-しい」を取る形容詞でも、「危なッかしい」のように促音を含むものがある。

三、反復形容詞の意味内容

劉懿珍さんが収集・整理した資料によると、日本語の反復形容詞は総数 49 個あるが、これらの反復形容詞を子細に観察・分析すると、次のような一般化が得られる。

(一) 反復形容詞は語尾に「-しい」を取るので、その他の「-しい」形容詞と同じく、その絶対多数が客観的属性を表す知覚形容詞や関係形容詞には属さず、直観的判断を表す評価形容詞や主観的な感覚・情意を表す感情形容詞に属する⁸ ことになるが、反復形容詞はすべてが評価形容詞に属するのが特徴である。これは「シク活用」の形容詞に共通する意味特徴であり、劉懿珍さんの資料と統計によると、「-しい」（「-じい」を含む）を語尾に取る基礎形容詞の総数 233 語のうち、評価形容詞は 128 語（55%）、感情形容詞は 37 語（16%）になる。

(二) 反復形容詞の語幹反復は一般に **反復による強調**（emphasis by reduplication）の意を表す。例えば、「あらあら(荒々)しい」は「いかにも荒っぽい様子」を表し、「いまいま(忌々)しい」は「いかにも腹立たしい様子」を表す。このような反復による強調は異なる品詞の語幹に見られる。例えば、名詞の反復は、「ひとびと(人々)・ことごと(事々)・いえいえ(家々)・ひび(日々)」のように、「どの／どんな～でも」と **普遍量化**（universal quantification）の意味に解釈されたり、「こなごな(粉々)（に

⁸ 知覚形容詞・関係形容詞・評価形容詞・感情形容詞などの分類に関する基準や機能については、湯（2006a）を参照されたい。また、関係形容詞の中には、「等しい・ふさわしい・親しい」などのように、ごく少数の例外的に評価や感情の意味を表さないものがある。

なる)」のように状態や程度の激烈さを表す⁹。形容詞や形容名詞も、「ふかぶか(深々)(と頭をさげる)・かるがる(軽々)(と荷物を持ち上げる)・ちかちか(近々)(にお目にかかる)・(正々)堂々と・遅々として進まず・路漫々」などのように軽い強調の意味を表すので、さらに程度副詞の修飾を受けることは少ない。動詞も「有りと有らゆる・選りに選って・泣き 泣き・男泣きに泣く」のように、普遍性や反復性などの強調の意味を表す。反復形容詞の総語数 49 例のすべてに、強調の意味が見受けられ、この結果、反復形容詞は一般的に程度副詞の修飾を受けることが少ない。

- (三) 反復形容詞の語幹の **文法範疇** (grammatical category ; すなわち、品詞) を調べて見ると、形容詞語幹と思われるものが「あらあらしい・いたいたしい・おもおもしろい・かるがるしい・くどくどしい(くどいくど(口説く)・ながながしい・にがにがしい・にくにくしい・ふてぶてしい(ふていくふとい)・ふるぶるしい(古語)・よわよわしい・わかわかしい」など 12 例 (24.5%) ・名詞語幹と思われるものが「ういうい(初々)しい(「うい」古語)・うやうや(恭)しい(古語¹⁰)・おお(雄々)しい・かいがい(甲斐甲斐)しい・かどかど(角々)しい・ことごと(事々)しい・そらぞら(空々)しい・どくどく(毒々)しい・とげとげ(刺々)しい・なまなま(生々)しい¹¹・

⁹ 語幹の語義によって、「ものごとはほどほど(程々)にきなさい」のようにも必ずしも強調を表さないものもある。

¹⁰ 『大辞林(インターネット版)』によれば、「うや」は古語で「礼」を意味し、「うやま(敬)う」「うやま(敬)い」などと語源をともにするという。

¹¹ 「なま」は「なま(生)な魚」とは言うが、「なまな魚」とは言わないので、共時的に形容名詞とはみなさず、名詞とみなすことにする。

なれなれ(馴れ馴れ)しい¹²・はなばなしい(「はな」は「花・華」から来たものと思われる)・まがまがしい¹³・みずみずしい(「みず」は「水・瑞」から来たものと思われる)・ものもの(物々)しい・めめ(女々)しい・よそよそ(余所余所)しい¹⁴」など 17 例 (34.7%)、形容名詞語幹から来たと思われるものが「ばかばか(馬鹿馬鹿)しい・はではで(派手派手)しい・まめまめしい(まめ<忠実(な))・にぎにぎ(賑々)しい(にぎ<賑やかな)」など 4 例 (0.8%)、動詞から来たと思われるものが「いまいま(忌々)しい(いま<忌む)・おどろおどろしい(おどろ<驚く)」の 2 例 (0.4%)、漢語から来たと思われるものが「ゆゆ(由々)しい・りり(凜々)しい・れいれい(麗々)しい」の 4 例 (0.8%)、その他語源がはっきりしないものが「けばけばしい・こうこう(神々)しい・ぎょうぎょう(仰々)しい・くだくだしい・すがすが(清々)しい・たけだけ(猛々)しい・たどたどしい・はかばか(捗々)しい・ふくぶく(福々)しい¹⁵」などの 9 例 (18.3%) となる。

また、語源のはっきりしないもののうち、「くだくだしい」は「説明や弁解などがまわりくどく長たらしい様子」を表す擬態語の「くだくだ」を語源をともにするものと思われ、「けばけば(毳)しい」も「ひどくけばだっている様子」を表す「けば(毳毳)」と語源をともにするものと思われるが、その品詞は定かではない。

¹² 「なれ」は「な(馴)れる」と解釈すれば動詞であるが、「親しい人達の間でもなれ(あい)があつてはならない」などのように「なれること、なじむこと」の意味でも使われるので、ひとまず名詞とみなしておく。

¹³ 『大辞林(インターネット版)』によれば、「まが」は「禍」を意味するという。

¹⁴ 「よそ」は「よそ(余所)の人」とは言うが、「よそな人」とは言わないので、共時的に名詞とみなすことにする。

¹⁵ 「ふくぶくしい」は「ふくよかな、ゆたかな」の意味で使われ、漢語の「福」から来たものであろうか、それとも擬態語の「ぶくぶく(太り出す)」と語源的に関係があるのであろうか。

以上の分析と統計から、反復形容詞の語幹は名詞（17 例）・形容詞（12 例）・形容名詞（4 例）などのように、人や事物の性質や状態を表す名詞と形容詞がもっとも多く、漢語語幹（3 例）もその語源は形容詞であり、動詞語幹（2 例）も経験者主体を主語に取る感覚動詞「忌む・驚く」である。語源がはっきりしない語幹もその音韻構造が擬態語と非常に似ているので、状態を表すと解してよかろうと思われる。

- （四）反復形容詞は一般に「いかにも…である／見るからに…そうな様子」などと解釈することができる。例えば、「あらあら(荒々)しい」は「行為態度がいかにも乱暴で粗雑である様子」¹⁶、「いたいた(痛々)しい」は「見るからに痛そうな様子、また心に苦痛を覚えて正視できない様子」、「いまいま(忌々)しい」は「非常に怒りを感じる様子」などのように、下線を施した部分が反復による強調の意味を表している。

この点、「見るからに、なんとなく」などの意味を表す接尾辞的な語幹「～くさい」（例えば、「いんき(陰気)くさい」は「見るからに陰気で不快な様子」の意味を、「うさん(胡散)くさい」は「なんとなく不審で気が許せない様子」の意味を表す）は反復形容詞と同じく、評価対象の様相から受けた印象を「いかにもそうである」と強調する形で表現している。ただ、「～くさい」を含む形容詞と反復形容詞の違う点は、前者のほとんどすべてがマイナスイメージの語であるのに対し、後者の中には「あらあらしい・いまいましい・おどろおどろしい・かどかどしい・かるがるしい・ぎょうぎょうしい・くだくだしい・くどくどしい・けばけばしい・ことごとしい・ずうずうしい・そうぞうしい・そらぞらしい・たけだけしい・たどたどしい・どくどくしい・とげとげしい・ながながしい・なまなましい・なれなれしい・にがにがしい・にくにくしい・はかばかしい・ふてぶてしい・ふるふるしい・

¹⁶ これ以下の反復形容詞の語義解釈に関する説明は飛田・浅田（1991）から。

まがまがしい・めめしい・ものものしい・ゆゆしい・よそよそしい・よわよわしい・れいれいしい¹⁷」のようにマイナスイメージの語もあれば、「おもおもしろい・にぎにぎしい¹⁸」のように必ずしもマイナスイメージを含まない語もあり、「ういういしい・うやうやしい・おおしい・かいがいしい・こうごうしい・すがすがしい・はなばなしい・ふくぶくしい・まめまめしい・みずみずしい・わかわかしい¹⁹」のようにプラスイメージの語さえある。

また、語幹を共通する反復形容詞と「-らしい」「-くさい」を含む形容詞（例えば、「ばかばかしい」「ばからしい」と「ばかくさい」・「ふるぶるしい」と「ふるくさい」）とを比べてみると、後者のマイナスイメージは前者のそれに比べてかなり強いことがわかる。例えば、飛田・浅田（1991）によると、「ばかばかしい」は「ばかげていて、とるにたりない様子を表す、ややマイナスイメージの語²⁰」であるが、「ばからしい」は「軽蔑すべき様子を表す、マイナスイメージの語²¹」、そして「ばかくさい」は「非常に軽蔑すべき様子を表す、マイナスイメージの語」とあり、「ふるぶるしい」は「いかにも長い時間を経過していて、いたんでいるような様子を表す、ややマイナスイメージの語」であるが、「ふるくさい」は「長い

¹⁷ 飛田・浅田（1991）によると、これらの形容詞は、「ながながしい」がややマイナスイメージ寄りの語（－）に、「あらあらしい・ぎょうぎょうしい・ことごとしい・にがにがしい・ばかばかしい・ふるぶるしい・ものものしい・よそよそしい、よわよわしい・れいれいしい」がややマイナスイメージの語（――）に、そしてその他の語がマイナスイメージの語（―――）に属している。

¹⁸ 飛田・浅田（1991）によると、「おもおもしろい」はプラスマイナスイメージはない語（0）に、「にぎにぎしい」はややプラスイメージの語（++）に属す。

¹⁹ 飛田・浅田（1991）によると、これらの形容詞はすべてプラスイメージの語（+++）に属する。

²⁰ これ以下の注釈の下線は本稿の筆者による。

²¹ 飛田・浅田（1991）には「ばからしい」と「ばかくさい」のほかに、「あほらしい」と「あほ(阿呆)くさい」の項も見られ、「あほらしい」は「ばからしい」よりも「もっと土俗的な侮蔑の暗示がある」とあり、「あほ(う)くさい」は「真剣に取り組むだけの価値が感じられない様子を表す、マイナスイメージの語」とある。「あほらしい」と「あほくさい」は、ともに関西方言から共通語化した語で、俗語的であり、もっとはっきりした侮蔑の暗示があるとも言っている。

時間が経過して新鮮さがなくなっている様子を表す、マイナスイメージの語」とある。従って、「XX しい」がマイナスイメージの語である場合、「X らしい」は「XX らしい」よりも、そしてさらに「X くさい」は「X らしい」よりも、マイナスイメージを強調することになる。

四、反復形容詞の統語機能

反復形容詞の統語機能については、次のような特徴が観察される。

- (一) 反復形容詞は日本語形容詞の下位分類において、客観・知覚形容詞と主観・感情形容詞の中間に位置づけられる直観・評価形容詞に属する。すなわち、評価形容詞はヒト・モノ・コトやサマに対して価値判断を表す形容詞である。評価形容詞の **項構造** (argument structure) は原則的に **内項** (internal argument) だけを取る **1 項述語** (one-place predicate) に属し、またこの内項の **主題役割** (thematic role) は評価対象を表す **対象**²² (theme) ので、反復形容詞の **セータ枠** (theta-grid)²³ は [Th] のように表すことができる。評価形容詞は一般にこのようなセータ枠をもつが、その中にはごく少数が「(法律に) あか(明)るい・(内部の事情に) くわ(詳)しい・(金に) こま(細)かい」などのように“方面” (「～に関して」) や「(奥さんに)あま(甘)い・(生徒に) きび(厳)しい」などのように“相方” (「～に対して」) の意味を表す「二格」を **疑似項** (quasi-argument)²⁴ に取る (す

²² 「主題」や「主体」と訳されることもある。

²³ **意味役割** (semantic role) と呼ぶこともある。

²⁴ 述語の項構造の中で純粋な **構造格** (structural case) 「ガ・ヲ」ではなく、**意味格** (semantic role) に近い「ニ・ト」などが **必須項** (obligatory argument) として起るものを「疑似項」と仮称する。また、「ニ」格は、「ガ」格と「ヲ」格以外の **デフォルト的** (default) な構造格とみなすことができ、形容詞文のほか、受動文・使役文など数多くの文型に現れている。

なわち、[Th, Go]) のに対し、反復形容詞は一律に「ガ」格を取る“対象”のみをそのセータ枠の中に含む。また、同じく「-しい」の語尾を取る形容詞の中には、評価形容詞に属するもののほかに、関係形容詞（例えば、「（～に）ひと(等)しい・（～に）ふさわ(相応)しい・（～と）した(親)しい」）や感情形容詞（例えば、「楽しい・悲しい・嬉しい・淋しい・恥ずかしい」など）に属するものがあるが、反復形容詞はその全体が評価形容詞に属している。この意味で、反復形容詞は評価形容詞という **親集合** (superset) の中に **子集合**（すなわち、**部分集合** (subset)）として位置づけることができる。

- (三) また、益岡（1987：29－31）は、形容詞述語のうち、「属性形容詞」と「感情形容詞」、はそれぞれ「属性叙述文」と「静的事象叙述文」を構成する、として、「事象叙述」の中から「静的事象叙述」を区別し、属性叙述には対象の「内在的属性」を表すものと、「非内在的属性」を表すものとが区別できると、述べているが、評価形容詞、とくに反復形容詞は、そのうちのどちらに属するのであろうか。益岡（1987）の言う「内在的属性」と「非内在的属性」はそれぞれ **恒常的属性述語** (individual-level predicate) と **一時的事態述語** (stage-level predicate) が表す属性と言い換えることができると思われる。さらに、益岡（1987）は、評価形容詞をも属性形容詞の中に含めて感情形容詞と対立させているように感じられるが、属性形容詞が客観的に知覚される対象の「内在的属性」を叙述し、感情形容詞が主観的に感情主体（すなわち、一人称話し手）の感覚・情意（すなわち、「非内在的属性」）を表出しているのに対し、評価形容詞は評価者が直観的に対象物に対して価値判断を下しているので、問題になる属性は完全に「内在的」ではなく、と言っても完全に「非内在的」でもないのである。つまり、属性形容詞は客観的な主体の存在を前提にその恒常的な属

性（すなわち、「内在的属性」）を叙述し、感情形容詞は感情主体の内部における生理的感覚や心理的情意の一時的な状態（すなわち、「非内在的属性」）を表出するのに対し、この両極の形容詞の中間に位置づけられる評価形容詞は対象物の（内在的属性）の存在を前提としながらも、評価者の直観（非内在的属性）に基づいて価値判断をするという **二面性**（duality）を呈しているのである。湯（2006a）が日本語の形容詞を「客観・知覚形容詞」・「中間・評価形容詞」・「主観・感情形容詞」と大きく3分した理由もここにあると言える。

- （四）さらに、形容詞には「叙述・述定」と「修飾・装定」の二大用法があるが、仁田（1998）によると、属性形容詞は装定用法に使われることが多い（調査資料の 424 個の語例において装定用法と述定用法が占める割合は 77%対 23%である）のに対し、感情形容詞は述定用法として使われることが多い（調査資料の 424 個の語例において装定用法と述定用法が占める割合はそれぞれ 43%対 57%、および 36%対 64%である）という。仁田（1998）には評価形容詞に関する統計はないが、劉懿珍さんの協力のもとで行われたデータ収集と初歩的な統計調査によると、その装定用法と述定用法はほぼ半々になるのではないかとと思われる²⁵。

このような異なる 3 種類の装定用法と述定用法における異なる分布は、同じ形容詞でも状態性が比較的濃厚な属性形容詞は欧米言語の形容詞の本来の機能に近い **連体言**（adjectival）として使われることが多いのに対し、感情表出という多少動作性を帯びる感情形容詞は叙述を本来の機能とする動詞に近寄りをみせて **用言**（verbal）として使われることが多いことを物

²⁵ このほかにも、湯（2006a）は評価形容詞が 3 種類の形容詞の中で、語例の数がもっとも多く、使用頻度ももっとも高いことを指摘している。

語っている。従って、両者の中間に位置づけられる評価形容詞は、装定（連体言）用法と述定（用言）用法の両機能をほぼ同等に合わせもつわけである。これら仮設のさらなる検証は、**コーパス言語学**（corpus linguistics）による接近法を用いて実証的に調査しなければならないが、それは将来の研究課題として残しておきたい。

- （五）反復形容詞は、一般の形容詞と同じように、終止・連体形「-(し)い・-(し)かった」・連用形「-(し)く・-(し)う」・未然形「-(し)かる」・假定形「-(し)けれ」と活用変化するが、連用形のうち平安時代に現れたと言われる「-(し)う」の「ウ音便形」は、現代口語でも「お高／早／強うございます」のように敬語表現の「(お)～ございます」と共起して使われるが、反復形容詞はその大半がマイナスイメージの語であるせいか、敬称や美化を表す接頭辞「お-」と共起することは皆無と言ってよいほど少なく、「(ほんとうに) いまいまし／にくにくしうございます」というような表現も相手（とくに目上の人）がすでに持っている（あるいは持っているだろうと推察される）評価判断に賛意を表す場合のみに使われるというような語用論的制限を受けることが多いと思われる。

- （六）最後に、反復形容詞と程度副詞との共起関係を考えて見よう。反復形容詞は語形内部での反復によってすでに強調の意味が表されているので、程度副詞と共起することが少ないと思われる²⁶ が、実際はどうであろうか。試みに飛田・浅田（1991）のア行に現れた 8 つの反復形容詞の関連例文を調べてみると、合計 24 個の例文のうち 4 個だけが「彼の包帯姿はまことにいたいしたい」「なんていまいましい風なんだ」「新入生の新しい制服姿はなんともいういしい」「[若奥様の]挨拶はいかにもういういし

²⁶ 緩和を表す接頭辞「もの-」も、「なんとなく」以外の程度副詞を取ることは少ない。

かった」のように程度表現の修飾を受けている。しかも、これらの程度表現は「とても・大変・非常に」などの典型的な程度副詞ではなく、「まことに、なんて、なんとも、いかにも」など多少モダリティ的な意味が含まれた程度表現であるのが特徴である。しかし、このように簡単な検証の仕方では、程度副詞と反復形容詞対一般形容詞の間における共起関係が比較できないので、これら反復形容詞と語幹を共通する関連形容詞「あらい」「いたい」「いまわしい」などの例文も調べてみたところ、「ばかに鼻息があらいじゃないか」「まったく人づかいがあらい人だから」「こんなあらい仕事ではまだまだ一人前じゃないね」「彼の話を聞いてなんとなくいまわしい予感がした」「（子供を抱き上げて）ずいぶんおもくなったね」のような用例が見受けられたが、両者の間における語例の数も例文の数も異なるので、そこに有意義な結果があるとは言えない。結局、この問題もコーパス言語学による検証を待たなければならないであろう。

このほか、反復形容詞は一般に口語よりも文章語に使われることが多く、従って一般の形容詞とは違い、「ダサ(*ダサ)い」や「ナウ(*ナウ)い」のように新語を生み出しにくいという傾向が見られるようである。

五、結び

以上、反復形容詞の音声形態・意味内容・統語機能について述べてきたが、このような理論的な記述や分析は現場の日本語教育でどんな役に立つのであろうか。語幹を共通する一般形容詞と反復形容詞を例に引きながら、これら形容詞の使い分けをどういうふうに説明すればよいのか考察してみよう。

まず、「あらい」・「あらっぽい」と「あらあらしい」の3つの形容詞の使い分けについて述べる。「あらい」は元来客観的な属性を表し（例えば、「ものの表面

に凹凸があつて平らでない様子」を表す「きめのあらい布地、手ざわりのあらい木綿のタオル」²⁷、「ものの表面に隙間があつて緻密でない様子を表す「目のあらい網・あらいしま模様」、「たくさんあるものの粒が大きい様子」を表す「あらくひいたコーヒー・あらい砂」など」）、従ってプラスマイナスのイメージはない属性叙述の形容詞から、**隠喩** (metaphor) や **共感覚** (synaesthesia) を経て「動きが激しく勢いがよい様子」を表す（例えば、「あらい波・あらい息づかい」など）プラスマイナスのイメージはない事態描写の意味に転化し、さらに「態度・性質などが乱暴な様子」を表す「語気あらく・金づかいがあらい」や「細部に神経がゆきとどいていない様子」を表す「ゆうべの試合運びはあらくて大味だった・こんなあらい仕事ではまだまだ一人前じゃないね」などとマイナスイメージの意味を表す評価形容詞にまで拡張していることがわかる。一方、「あらい」がプラスマイナスのイメージがない客観的な属性やマイナスのイメージはあるものの特定の感情は含まれていない、直観的な評価形容詞として使われるのに対し、「あらっぽい」はモノ名詞の属性叙述には使われず、行為を表すコト名詞の事態描写のみに使われる、ややマイナスイメージの評価形容詞である。そして、「あらあらしい」も「行為・態度などがいかにも乱暴で粗雑である様子」を表す、ややマイナスイメージの語であるが、「あらい」や「あらっぽい」よりも「乱暴さの程度が大きく、不快感がこもる」形容詞である²⁸。

次に、「いまましい」と「いまわしい」の使い分けについて述べる。この2つの形容詞はともに動詞の「い(忌)む」に語源を発すると思われ、ともに「-しい」の語尾を含む評価形容詞に属し、ともにマイナスイメージをもつ文章語であるが、飛

²⁷ これ以降の形容詞に関する意味解釈とその例文は飛田・浅田（1991）から。ただ、述定用法はできるだけ装定用法に変えてある。

²⁸ 「あらい」を語幹とする形容(名)詞は、このほかに「てあらな」や「てあらい」があるが、ここでは詳述しない。

田・浅田（1991：65,66）によると、「いまましい」が「個人の主観的な(嫌)悪を表す」のに対し、「いまわしい」は「個人の好(悪)を超えた絶対的な嫌悪」を表すと言う。そして、もう 1 つの反復形容詞「まがまがしい」は意味と使い方が「いまましい」に「似ているが、「まがまがしい」のほうが忌避感が強い」と言う。

さらに、「いたい」「いたましい」「いたいたしい」の 3 つの形容詞の使い分けについて述べる。「いたい」は感情形容詞の感覚形容詞に属し、その項構造は一人称の **経験者** (Ex(perience)r) を **外項** (external argument) に、その **身体部位** (body-part) を表す **場所** (Lo(cation)) を内項に取る（すなわち、 $[Ex_{<+I>}, Lo_{<+b.p.>}]$ ²⁹ の項構造をもつ）ので、「私はどこ（例えば、「頭・胃・おなか」など）がいたい」のように、**2 項述語** (two-place predicate) として使うことができる。このとき、外項の経験者と内項の身体部位との間には広義の「所有者」と「所有物」の **メトニミー** (metonymy)、あるいは「全体」と「部分」の **パートニミー** (partonymy) の関係があり、両者は **再帰的** (reflexive)、あるいは **同一指示** (co-indexed) でなければならない。すなわち、「私は頭がいたい」の「頭」は必ず一人称話し手の「私」の「頭」でなければならないのである。一方、語尾「-しい」を含む「いたましい」と「いたいたしい」は、どちらも「心に苦痛を覚えて正視できない様子」を表す評価形容詞に属し、1 項述語である。ただ、飛田・浅田（1991：58－60）によると、「いたましい」がややマイナスイメージの語であるのに対し、「いたいたしい」にはプラスマイナスのイメージはないと言う。また、「いたいたしい」が「おもに対象の外見の様子を評した語」であるのに対し、「いたましい」は「それを見て感じ、憐れみや同情などの気持を表すというニュアンスの違いがある」と言う。

最後に、「にくい」「にくらしい」「にくたらしい」「にくにくしい」の 4 つの形容詞の使い分けについて述べる。「にくい」は感情形容詞の情意形容詞に下位分類され、一人称の経験者を外項に、そして情意の対象を内項に取る（すなわち、

²⁹ $<+I>$ と $<+b.p.>$ はそれぞれ「一人称」と「身体部位」を表す。

[Ex<+I>, Th<+ヒト>]の項構造をもつ) 2 項述語に属するので、「私は誰³⁰ がにくい」のように使われる。また、一人称経験者の外項は、談話の状況や文脈の関係で自明の場合には省略されることが多く、その結果 1 項述語かのように振る舞うことがある。ことに、情意の対象が **総称名詞** (generic noun) の場合、「きんぴらとのりとベーコンの取り合わせがなんともニクイ」のように、反語的に「たいへんすばらしい」というプラスイメージを表す評価形容詞にさえ転化する³¹。一方、語尾「-しい」を含む「にくらしい」「にくたらしい」「にくにくしい」は 3 つとも評価形容詞に属し、1 項述語 ([Th]) として使われるのが原則である。また、「にくい」の対象がヒト名詞に限られるのに対し、これらの評価形容詞は「彼のしうちはにくらしい」「社長の不公平な裁量はにくたらしい」「お前の口のきき方は実にくにくしい」のようにコト名詞にもおよぶ。さらに、「にくい」の暗示する嫌悪の情は非常に感情的であり、かつ継続的なものであるので、飛田・浅田 (1991 : 626) では、マイナスイメージの語 (— — —) として分析されている。さらに、「にくい」が情意形容詞として、一人称話し手の憎悪そのものを表出するのに対し、「にくらしい」は憎悪を感じさせる対象の性質について評価するので、マイナスイメージの程度 (— —) は「にくい」ほど高くないという³²。また、「にくたらしい」の語尾「-たらしい」は、「いかにも嫌悪の気持ちをそそるようで不快だ」の意味を表し、そのマイナスイメージの程度 (— — —) は「にくらしい」より高い。最後に、「にくにくしい」も「いかにも憎悪がこもっている様子」を表すマイナスイメージの語 (— — —) であるが、「にくらしい」や「にくたらしい」が憎悪を感じさせる対

³⁰ 飛田・浅田 (1991 : 423) によると、「にくい」の対象は主に人間 (ヒト名詞) であることが多く、物事 (モノ名詞・コト名詞) は擬人法を除いては対象になりにくいので、「息子を有罪にした法律は {[?]憎い/恨めしい}」のように「恨めしい」が使われるとある。

³¹ 飛田・浅田 (1991 : 423—424) を参照。

³² 飛田・浅田 (1991 : 426) を参照。

象の性質そのものを表すのに対し、「にくにくしい」は対象の外見に現れた憎悪の気持ちを表し、憎悪の程度がさらに高いという³³。また、「にくらしい」が「にくらしい（＝いとしい）あの人」「にくらしいほど落ち着きはらっている」のように反語的なややプラスイメージの語（++）として使われ、「にくたらしい」は「にくたらしい（＝憎悪をそそる）あの人」「せっかくの誕生日にこないなんて、にくたらしい人ね」のようにやや反語的に愛情と恨みがいりまじった複雑な心理をそそるというニュアンスで使われるのに対し、「にくにくしい」にはこのような反語的用法はないところからも、三者の不快指数の差異がうかがわれる³⁴。

以上共通の語幹をもつ単純形容詞、「-らしい」形容詞・「-たらしい」形容詞・反復形容詞などの使い分けについて、現場の授業で役に立つと思われる背景知識を提供した。これら形容詞の使い分けについては、最終的には辞書や文法書からの情報も有益かつ必要であろうが、「X い」「X らしい」「X たらしい」「XX しい」などの音声形態を表す式型が、ある特定の意味内容と統語機能を具現するということを学生に理解してもらうのも大切であることもわかっていただけたと思う。

後記：本文の投稿に際して、匿名の審査員から次のようなご指摘があったので、ここを借りて簡単にお答えしたい。

1. 一般に「生徒」は中、小学生に使われ、大学では「学生」と呼ばれることが多いので、「学生」を使った方がよからう。
2. 出来ることなら、49 個の反復形容詞について一々項構造を付記することが望ましい。
3. 反復形容詞のプラスやマイナスイメージはその原則である単純形容詞がプラ

³³ 飛田・浅田（1991：425）を参照。

³⁴ 飛田・浅田（1991：425）を参照。

スイメージであるか、マイナスイメージであるかによって決まり、プラスイメージの場合は「お若々しい」「おすがすがしい」のように接頭辞「お」を取ることができる。

1. については、迂闊ながらこのような意味・用法上の区別に気がつかなかった。
戦前派に属する筆者は、「先生と生徒」や「教師と学生」のように対で使うときは両者を区別することがあるが、その他の場合は意識して区別したことはない。また、太平洋戦争の末期になると、「学徒」という呼び方が中学生や大学生を対象に使われるようになったと記憶している。審査員のご指摘が正しければ、「生徒」は「学生」と訂正した方がよかろう。
2. 日本語の反復形容詞はすべて対象を内項に取る一項評価述語に属する（22ページ 1 行目の論述を参照）ので、敢えて一々それらの構造を付記することをしなかった。
3. 一応ご指摘の通りであるが、反復形容詞の中にはそれに対応する単純形容詞が存在しないものや対応するのは形容詞ではなく、名詞や動詞のものも多数あり、対応する単純語がある場合でも、「ながい」「なまな」「なれ（る）」にはマイナスイメージがないのに、反復形容詞「ながながしい」「なまなましい」「なれなれしい」にはマイナスイメージがあるように、かなりの例外があると思われる。また、美化接頭辞「お」が取れるかどうかについては、形容詞（「お美しい」「*お醜い」）や形容動詞（「お奇麗」「お上手」「*お下手」）一般について言えることなので、本文では敢えて触れなかったが、この問題も「お」が丁寧語として使われる場合には、「お静かに願います」「アンヨはお上手・転ぶはお下手」のような使い方がある。

参考文献

窪菌晴夫『(現代言語学入門) 日本語の音声』、岩波書店、(1999)。

佐久間鼎『現代日本語の研究』、厚生閣、(1941)。

湯廷池「日本語形容詞の下位分類：分類基準と機能」、(未発表)、(2006a)。

_____「日本語の形容詞と動詞と名詞」、(未発表)、(2006b)。

_____「日本語形容詞の研究：形容詞・形容名詞と名詞・動名詞」、(未発表)、
(2006c)。

_____「日本語の動詞と形容詞について」、『東吳日語教育學報 30 期』、
(2007)。

仁田義雄「日本語文法における形容詞」『月刊 言語』3 月号、大修館書店、
(1998)。

飛田良文・浅田秀子『現代形容詞用法辞典』、東京堂、(1991)。

益岡隆志『命題の文法—日本語文法序説—』、くろしお出版、(1987)。